

一般社団法人日本化学連合 2021 年度事業報告

日本化学連合が「任意団体」から「一般社団法人」に移行してから 12 年目となり、岩澤康裕会長のもと、副会長、理事、監事が協力して運営にあたり、本年度の活動を展開した。

具体的には、運営委員会ではおもに化学コミュニケーション賞 2021 の実施、企画委員会では第 15 回日本化学連合シンポジウムの実施、また将来構想委員会内ワーキンググループを開催し、日本化学連合のあり方と将来像・計画についての検討を行った。また、化学系学協会連絡会では定例会議を 2 回実施した。

1. 会員の増減

本年度の正会員の会員数は 14 学協会であったが、年度末に電気化学会が退会したため、来年度は 13 学協会となる。賛助会員は団体会員 2、個人会員 3 で変わらなかった。化学系学協会連絡会は新たに日本分析化学会が入会し、正会員 14 学協会、連絡会会員 10 学協会、オブザーバー参加 4 学協会となった。

2. 日本化学連合 2021 年度活動報告

2.1 化学コミュニケーション賞 2021

当連合の設立趣旨の一つである「化学関係団体が賛同して開催する事業」を強化・発展させるために、化学と化学技術に関係する啓発活動や情報発信を行うことによって、化学教育、化学産業の育成、および発展に貢献した個人ならびに団体を表彰する制度を、平成 23 年（2011 年）度に「化学コミュニケーション賞」として創設した。本年度も、運営委員会委員を中心として「化学コミュニケーション賞 2021」を企画・実施した。

[運営委員会]

委員長	関 隆広	(代表理事 副会長；高分子学会)
副委員長	関根 泰	(理事 石油学会)
委員	岡本 昌樹	(理事 触媒学会)
委員	澤本 光男	(理事 日本化学会)
委員	渡部 恭吉	(常務理事)
オブザーバー	岩澤 康裕	(代表理事 会長；日本化学会)

本年度の「化学コミュニケーション賞 2021」は、当連合の主催、(株)化学工業日報社、(一社)化学情報協会の共催、(国研)科学技術振興機構、(公社)新化学技術推進協会、(一社)日本サイエンスコミュニケーション協会および(株)化学同人に後援をいただき実施された。2021 年 10 月 1 日に募集を開始し、12 月 10 日に締め切ったところ、個人 12 件、団体 3 件、計 15 件の応募があった。

[化学コミュニケーション賞 2021 賞選考委員会]

委員長	： 関 隆広	(名古屋大学)
副委員長	： 関根 泰	(早稲田大学)
委員	： 内田麻理香	(東京大学 特任講師・サイエンスライター)
委員	： 岡本 昌樹	(慶應義塾大学)
委員	： 佐藤健太郎	(サイエンスライター)
委員	： 里川 重夫	(成蹊大学)

- 委員：澤本 光男（中部大学）
- 委員：安永 俊一（(株)化学工業日報社）
- 委員：山本 伸一（化学情報協会）
- 委員：渡辺 政隆（日本サイエンスコミュニケーション協会）
- 委員：渡部 恭吉（日本化学連合 常務理事）

これらの応募案件について、上記の選考委員が書面審査を行ったうえ、2022年1月11日(火)に開催した最終選考委員会で、化学コミュニケーション賞2件(個人)と審査員特別賞2件(個人)を決定した。表彰式は、2022年3月8日(火)13:00~13:50にオンラインで開催した。

化学コミュニケーション賞 2021 (個人)

受賞者：諸藤達也（学習院大学理学部）

業績の表題：動画配信による大学有機化学教育の普及

化学コミュニケーション賞 2021 (個人)

受賞者：尾嶋好美（筑波大学教育推進部）

業績の表題：家庭でできる科学実験の普及活動

化学コミュニケーション賞 2021 審査員特別賞 (個人)

受賞者：佐藤美子（四天王寺大学教育学部）

業績の表題：個別実験で共に楽しみ科学の芽を育む地域活動

化学コミュニケーション賞 2021 審査員特別賞 (個人)

受賞者：久保利加子（おもしろ！ふしぎ？実験隊）

業績の表題：正確な情報に基づく実験教室とその展開

2.2 第15回日本化学連合シンポジウム

本シンポジウムは企画委員会が担当し、第15回シンポジウムとして、「持続可能な社会構築のための見分ける化学、分ける化学」を企画した。

[企画委員会]

委員長	平尾 雅彦	(代表理事 副会長；化学工学会)
副委員長	岩田 忠久	(理事 繊維学会)
委員	窪田 好浩	(理事 日本ゼオライト学会)
委員	菅原 義之	(理事 日本セラミックス協会)
委員	入江 寛	(理事 電気化学会)
委員	松方 正彦	(理事 日本膜学会)
委員	渡部 恭吉	(常務理事)
オブザーバー	岩澤 康裕	(代表理事 会長；日本化学会)

持続可能な社会の構築に向けて、技術イノベーションが求められており、化学は、新たな分子を作り出し、素材や製品に新たな機能を与えることで、豊かな社会の構築に貢献してきた。加えて、混合物の中から求める分子や素材を見分け、取り出すことでも化学は貢献している。本シンポジウムでは、日本化学連合に参加する学協会における見分ける技術、分ける技術についての先端研究を紹介し、化学の役割を議論した。

第15回シンポジウムでは、参加者を増やし化学連合の認知度を高めるため参加費を無料（要事前登録）とし、広報手段としては会員学協会、業界団体（日化協、JACI など）・業界新聞などに共催・協賛を依頼した。具体的には、当連合の主催、化学工学会、クロマトグラフィー科学会、高分子学会、触媒学会、石油学会、電気化学会、日本エネルギー学会、日本化学会、日本ゼオライト学会、日本地球化学会、日本膜学会、日本薬学会の共催、化学工業日報社、化学情報協会、日本セラミックス協会、繊維学会、先端膜工学研究推進機構の協賛および科学技術振興機構、新化学技術推進協会、日本化学工業協会に後援をいただき、オンラインで実施された。

本シンポジウムの予約申込者数は380名、実際の参加者数は約250名となり、過去最多の参加者数を記録し、参加者アンケートの結果も好評であった。

第Ⅰ部 見分ける技術

<14:10~14:40>

- 1) 「多次元液体クロマトグラフィーによるキララアミノ酸分析」
濱瀬健司（九州大学大学院薬学研究院）

<14:40~15:10>

- 2) 「原子スケールの極微分光」
熊谷 崇（分子科学研究所）

第Ⅱ部 分子を分ける

<15:10~15:40>

- 3) 「カーボンニュートラルに貢献する分離工学」
松方正彦（早稲田大学先進理工学部）

<15:50~16:20>

- 4) 「人工光合成化学プロセスPJの概要と水素分離膜の開発」
武脇隆彦（三菱ケミカル(株)）

第Ⅲ部 素材を分ける

<16:20~16:50>

- 5) 「サステナブルテキスタイルと繊維リサイクル」
木村照夫（京都工芸繊維大学名誉教授）

<16:50~17:25>

- 6) 総合討論
モデレーター：黒田一幸（日本化学連合副会長）

2.3 日本化学連合 将来構想委員会内ワーキンググループ(WG) 報告

2021年10月22日に第1回将来構想委員会内WGを開催した。

日本化学会小林喜光会長から「日本化学会と日本化学連合が一緒になる」との提案があり、2021年8月4日に日本化学会と化学連合とで打合せの機会をもった。その後、化学連合側で議論するにあたり、将来構想委員会の下にWGを構成して検討を行った。

[将来構想委員会内ワーキンググループ]

議長	黒田 一幸	(副会長 日本セラミックス協会 将来構想委員会委員長)
委員	関 隆広	(副会長、高分子学会)
委員	平尾 雅彦	(副会長 化学工学会)
委員	入江 寛	(理事 電気化学会)
委員	大塚 浩二	(理事 クロマトグラフィー科学会)
委員	鍵 裕之	(理事 日本地球化学会)
委員	鈴木 慎一	(理事 日本化学会、第1回WGではオブザーバー)
委員	関根 泰	(理事 石油学会)
委員	渡部 恭吉	(常務理事)
オブザーバー	岩澤 康裕	(会長 日本化学会)

「日本化学会と化学連合が一緒になる」との小林日本化学会会長の提案に対してWG委員からは賛成の意見はなく、様々な視点から現時点での統合は難しい旨の意見で一致した。また、鈴木オブザーバーから、小林会長の発言の背景には、コロナ禍の影響で各学協会の収益が落ち、会員減少もある中で、今後の学会のあり方について考慮したものであるとの付言があった。

以上の意見・議論をふまえ、化学連合として、「一緒になる状況にはない」旨の回答を岩澤会長が小林会長に伝え、了承を得た。

次いで、化学系コミュニティや化学連合の今後のあり方に関連して自由に意見交換を行った。また、本WGにおける追加検討事項として「化学のビジョン」を示していく必要があるので、「化学の学術としての魅力とインパクトをどう高めるか。」について、今後検討することになった。

第2回将来構想委員会内WGを2022年1月14日に開催した。黒田副会長が議長となり、「化学系コミュニティや化学連合の今後のあり方」について、第1回WGにて自由討議を行った際に出された意見、コメントについて、再度検討し、以下の2点について具体的に進めることになった。

- 各学協会が発行している論文誌のロゴを一覧にまとめ、そこからそれぞれの論文にリンクさせる。これを英文で作成すれば、海外から日本の論文誌を見るサイトとなりうるので、このページは日本語と英語とし、加えて化学連合のHPのトップページも英文化も検討する。
- 各学協会がそれぞれ入門セミナーを開催しており、優れた内容のものも多くある。これらの入門シリーズをまとめてHPに掲載し、化学連合としてアナウンスすれば効果が大きいので検討する。

2.4 「政策提言案」および「環太平洋国際化学フェスタ（仮称）の定期的（4～5年毎）開催（共催）」提案書について

「政策提言書」の表出に対する共同提案学協会としての参画検討および「環太平洋国際化学フェスタ（仮称）」提案書について会員学協会への計画、開催の賛同、共催、協賛要請を会員学協会に検討依頼し、回答を集約した。

2.5 化学系学協会連絡会

化学系学協会の幅広いネットワークが必要な時代となっている現状を考え、化学系各学協会事務局の連携、情報交流などを目的として、「化学系学協会連絡会」を2018年に発足した。本連絡会は、政府政策等の学協会への情報提供、学協会のプラットフォーム整備のための情報共有、学協会の連携強化などを行い、日本化学連合の会員学会のみならず、多くの化学系学協会にご参加頂くことにより、日本の学協会の発展に寄与すべく活動している。

2021年度の化学系学協会連絡会は、新たに日本分析学会が参加し、正会員14学協会、連絡会会員10学協会およびオブザーバー4学協会が参加している。2021年度の連絡会幹事会は常任幹事3名と幹事2名で運営を行った。

参加学協会：

日本化学連合参画14学協会、火薬学会、錯体化学会、DVX α 研究協会、
日本ケミカルバイオロジー学会、日本表面真空学会、日本放射化学会、日本放射線化学
会、表面技術協会、粉体粉末冶金協会、日本分析化学会

オブザーバー参加学協会：

安全工学会、資源・素材学会、日本農芸化学会、有機合成化学協会

[連絡会幹事会]

常任幹事	重光 英之	（化学工学会 理事・事務局長）
常任幹事	佐藤 晴基	（高分子学会 常務理事・事務局長）
常任幹事	鈴木 慎一	（日本化学会 事務局長）

幹 事 市川真一郎 (触媒学会 常務理事・事務局長)
幹 事 柿田 和俊 (日本分析化学会 常務理事・事務局長)
事 務 局 渡部 恭吉 (常務理事・事務局長)
ホ ー ダ - 岩澤 康裕 (代表理事 会長 ;日本化学会)

本年度は幹事会を2回、定例会議を2回開催した。

化学系学協会連絡会 2021 年度第 1 回定例会議

日 時：2021 年 12 月 22 日 (火) 10:30~12:20

会 場：オンライン開催

テーマ：「新型コロナウイルス感染症収束後の学会運営を考える：①学会事務局の在り方、学会財務、会員動向、委員会活動について、②年会等のハイブリッド開催について」

新型コロナウイルス感染症 (COVID-19) 収束後の学会運営を考えるヒントとして、第 1 部では、「コロナ禍収束後の学会事務局の在り方、コロナ禍の影響による学会財務、会員動向、委員会活動について」の事例紹介を日本化学会と高分子学会から、第 2 部では、「年会等のハイブリッド開催」について、テクニカルな内容 (外注先もふくめ) と、現地およびオンラインで開催するにあたって、マンパワー、費用の発生がどうなるか等の具体的課題を化学工学会と石油学会から報告を行った。

プログラム：

第 1 部

10:05~10:30 日本化学会 鈴木慎一

10:30~10:55 高分子学会 佐藤晴基

第 2 部

11:15~11:35 化学工学会 重光英之

11:35~11:55 石油学会 松岡 徹

化学系学協会連絡会 2021 年度第 2 回定例会議

日 時：2022 年 3 月 31 日 (木) 10:00~12:00

会 場：オンライン開催

テーマ：第 1 部「学会運営を考える：本部と支部・部会・研究会とのあり方について」、
第 2 部「今後の定例会議で取り上げるべきテーマについて自由討議」

学会運営を考える際に、本部と支部・部会・研究会とのあり方についてしっかり議論することが重要である。例えば、本部会計と支部・部会・研究会の会計が別会計になっているケースが見受けられ、これは透明性が求められる学会運営において大きな課題である。そこで第 1 部では、現状の課題について日本化学連合から報告後、過去に会計の一体化を実施した事例紹介を高分子学会と触媒学会から報告を行った。また、第 2 部では、化学系学協会連絡会定例会議で今後取り上げるべきテーマについて自由討議を行った。

プログラム：

第 1 部

「学会運営を考える：本部と支部・部会・研究会とのあり方について」

10:05~10:15 趣旨説明 (日本化学連合事務局)

10:15~10:30 事例紹介 1 (高分子学会)

10:30~10:45 事例紹介2 (触媒学会)

10:45~11:30 質疑

第2部「化学系学協会連絡会 定例会議で取り上げるべきテーマについて自由討議」

11:30~11:55

2.6 功労賞受賞者受賞候補者の選考

運営委員会において「功労賞」および「若手研究者および50歳代程度の研究者の表彰」の2件の賞の新設について検討してきた。「功労賞」については、2021年度から運用することが承認されたので、2021年12月28日締切で功労賞者候補の推薦を依頼したところ、2名の推薦があった。

2022年2月10日に会長、副会長、常務理事による選考委員会を開催し、日本化学連合功労賞選考規程に従い、選考を行った。

審議の結果、平坂雅男氏(高分子学会 元常務理事・事務局長)と吉松賢太郎氏(日本薬学会 常任理事)を、全員一致で受賞候補者とし、理事会での承認を得て受賞者を決定した。

表彰の方法について議論した結果、表彰式は社員総会時に執り行うこと、表彰状と副賞を授与し、副賞は5万円とすることを決定した。

3. 会計

収入の部

正会員学協会、賛助会員(団体)、賛助会員(個人)、化学系学協会連絡会会費はほぼ予算通りの収入があった。さらに、本年度も(株)化学工業日報社および(一社)化学情報協会より、当連合主催事業「化学コミュニケーション賞2021」の活動に対して共催金として100万円(@50万円×2)の補助を受けた。また、講演会等収入は第15回日本化学連合シンポジウムを参加費無料で開催したためゼロであった。この結果、対予算32万円の収入減となり、当期収入合計は5,133,869円であった。

支出の部

2021年度は新型コロナウイルスの感染拡大防止のため、前年度と同様に会議はすべてオンラインで開催した。その結果、会議費は予算額に比して30万円の削減となった。事業費は、化学コミュニケーション賞2021の経費として63万円、第15回日本化学連合シンポジウムの経費として7万円の支出となった。この結果、事業費合計は、936,528円となり、予算額に比して約82万円の削減となった。

一方、管理費合計は、3,480,194円となり、予算額に比して21万円の削減となった。

この結果、当期支出合計は4,416,722円となり、対予算約104万円の削減となった。

結局、当期収支差額は717,147万円のプラスとなり、次期繰越金は6,770,516円となった。

4. 処務の概要

4.1 定時社員総会	1回
通常理事会	4回
4.2 理事19名、監事2名	
4.3 委員会など	
運営委員会	2回
企画委員会	4回
将来構想委員会内ワーキンググループ	2回
化学コミュニケーション賞最終選考委員会	1回
化学系学協会連絡会幹事会	2回

化学系学協会連絡会定例会議
監査会

2回
1回

以上